競技者における種目変更と継続に関する研究

～ソフトボール選手に着目して～

スポーツマーケティングゼミナール　1313046　塚越　美紀

１．研究動機・研究目的

松田（1978）は、スポーツを実施する要因として、「時間帯」「場所」「仲間」が影響している。その中で青少年のスポーツ実施の主な場所として「学校」が挙げられる（藤原ら,2010）。しかし、2011 年に文部科学書で行われた運動部活動の実態に関する研究において、学校での運動部活動は、少子化や指導者不足により休部や廃部、運動部として成り立てない状況が見受けられた。主な休部・廃部になった運動部活動の種目名として中学校、高等学校共に「ソフトボール」が挙げられた。また、「希望種目の運動部に所属している」との回答によると中学生で 61.0%、高校生で 48.1%であり、中学生の約 4 割、高校生の約過半数は希望種目がないため、他の種目の運動部に所属しているか、また運動部に所属していないことがわかった。

2013 年度日本ソフトボール協会に登録された競技者数は、板谷（2014）によると小学校において女子 4,724 人、男子 20,525 人である一方、中学校における競技者数は女子 19,183 人、男子 917 人と報告されている。このことから、小学校から中学校に進学すると、ソフトボール競技者数は女子においては約 4.06 倍増加し、男子は約 96%減少している。中学校における男女での競技者数の差異には、中学校でのチームや指導者、さらに参加可能な競技大会の不足といった環境の未整備が要因と考えられる（上野,2010）。

以上のことから、競技実施において、ある種目を続けたいにも関わらず生徒を取り巻く環境によって競技の種目を変更せざるをえない現状であると推測できる。

そこで本研究では、小学期から中学期において競技者数の変動が大きいことや中学期において男女の競技者の差が大きいソフトボールに着目し現役大学ソフトボール選手（男女）がどのように競技種目を選択してきたかを調査し明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

調査期間：2016 年 10 月 28 日（金）
調査対象：第 47 回関東大学ソフトボール選手権大会に出場したチーム（14 大学）
調査方法：直接配布・回収、後日郵送による質問紙調査
調査内容：個人的属性、競技歴、競技種目変更の有無、競技継続・きっかけの理由など
サンプル数：310 部（有効回答数：228 部　男性：72 名、女性：156 名）
分析方法：全体の傾向を把握するために単純集計を行い、必要に応じて統計分析を行った。
　　統計分析は IBM SPSS Statistics 19 を用いた。

３．主な結果と考察

本研究での対象者は、男性 80 名、女性 159 名で平均年齢 19.8 歳であった。これまで経験

した（現在の競技を含む）競技種目数は、2 種目が 44.3%（ｎ=101）と最も割合が高く、次いで 3 種目 28.9%（n＝66）、1 種目 20.0%（n=46）の順で割合が高く、行ってきた競技種目において一種目継続型より異種目継続型の方が約 4 倍多く、対象者の 73.2%は 2 種目以上の競技を経験し、最終的にソフトボールを選択してきたことがわかった。また、サンプルの約 50.0%が野球経験者であり、野球から類似した競技であるソフトボールへの転向がみられた。特に、男子においては約 95.0%が野球経験者であることがわかった。

今までの競技種目の中で、サンプルの過半数は競技種目を何かしらの理由で変更したことがあり、変更せざるをえない状況での変更している現状があった。実際に、本人の意志に関係なく競技種目を変更せざるをえなかった理由として、「女子は入れない」、「地域にチームや競技をできる環境がない」という実施環境の問題、ケガまたは経済的な問題が挙げられた。また、競技種目変更理由として男女に差がみられ、男性は、その競技に対する自分の感情の問題が多く挙げられた。一方、女性は実施環境の問題が多く挙げられ、男性より他者からの影響を受けて競技を変更する人が多くみられた。

ソフトボール継続、またソフトボールを始めたきっかけの理由として、全体を通して「自分の意欲」の項目の平均が高った。このことから、自分の意志に反して競技変更をせざるをえない状況になったとしても、類似する競技種目の選択や全く別の競技を自分の意志で始め、継続していることがわかった。

４．結論

今回の調査により、現役大学ソフトボール選手（男女）において自分の意志に反して、競技種目を変更せざるをえない状況であったことがある競技者が存在し実際に競技変更をしてきている。特にソフトボール、野球において男女における競技種目変更理由について違いがみられたのは、男女の間に競技の発展・普及の差があることによると考えられる。

今回の調査ではソフトボールを継続している競技者を対象にしたため、ソフトボールと野球とに起こった競技者移行がみられたが、他の競技間での競技種目変更においての現状はわからなかった。しかし、ソフトボールだけでなく他の競技を継続している者においても競技者における環境によって競技種目の変更が本人意思に関係なく競技変更が起こっていると考えられる。

今後、小学校、中学校、高等学校、大学において、性別によって部活動が選択できない現状や、設置されていない競技において学校や地域にクラブチーム設置を見直すことが必要だと考えられる。また、競技や性別により競技開始時期が異なるため、その特性に合わせ、特にマイナー競技こそ体験できる機会づくりを増やし競技者の獲得を目指していくことが必要だと考えられる。

５．卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の作成に当たり、担当教諭の工藤先生を始め、多くの方々にご協力を賜りました。また、調査に快くご協力して下さった関東学生ソフトボール所属の 14 大学のチームの皆様に深く感謝申し上げます。最後に、共に協力し時には励まし合いあい、頑張ってきたスポーツマーケティングゼミナ―ルの仲間に感謝しながら筆を収めたいと思います。